

——篠路らしい“地域主体のまちづくり”とは——

篠路地区の魅力について／ 魅力を活かしたこれからのまちづくりについて

令和2年度
まちづくり計画検討委員会の学識者等委員による座談会 抄録

【開催日】

令和3年3月18日（木）

【実施場所】

篠路コミュニティセンター 2階藍染室

【パネリスト】

鈴木 克典 委員長（北星学園大学）

小澤 丈夫 委員（北海道大学大学院工学研究院）

内川 亜紀 委員（札幌駅前通まちづくり株式会社）

事務局：札幌市事業推進課、昭和株式会社

テーマ1

篠路地区の魅力について

篠路って、どんなまち？

—— 鈴木先生と小澤先生は「東口駅前広場の在り方検討会議」から篠路に携わっていますが、篠路にはどのような印象をお持ちですか？

自然や文化を感じるまち



鈴木 自然と歴史・文化が非常に豊かな地域だと思います。旧琴似川がまちの中心にあり、周辺には伏籠川、様々な緑地・公園もある。河川は連続した自然空間として魅力があります。歴史を感じられる

北区最古の篠路神社、レンガや札幌軟石で造られた倉庫もある。篠路に来て歩いているだけでも、“そのもの”を感じられるまち、というのが第一印象です。

歴史資源が眠るまち

小澤 私は建築が専門なので、札幌各地にある歴史的な建造物の一つとして、以前から篠路駅前の倉庫群のことは認識していました。それを、駅前のリニューアルや現代のニーズにどう合わせていくのか、と

いう興味から入りました。

それから篠路に携わってみると、北区のなかでも歴史が古く、倉庫以前の歴史も長いということが分かりました。当初、考えていた以上の歴史的な価値があるまちだと再認識しました。



ただ、検討委員会などで何回かこちらに来た時に、そこをもっと感じることができないのではないか、という若干の物足りなさも感じていました。

—— 歴史的な資源やそのポテンシャルが眠っているまま、といったイメージですね。

人の愛着を感じる “味のある”まち

内川 私が最初に篠路に来たのは、この仕事と関係なく、初詣で篠路神社に来たときでした。その時、すごい行列ができていて、“あ、こんなにまちの拠点なんだ”と思いました。神社が人の生活、くらしに根差しているのだと。



JRで来ると、篠路駅の辺りは雰囲気が変わるところかなと思っています。



篠路神社のお祭りの様子（平成28年）

だからこそ昔ながらのお店などが残っているんだろうな、と思いますし、そうした“味がある”まちだという印象です。

—— 初詣のお話から、イベントの際に人が集まる地域という印象を受けました、そのあたりのまちの印象をもう少し教えてください。

内川 お祭りなどの写真をみていると、色々な世代の方が参加されていますが、平日の夕方にまちを案内頂いたときに、時間帯が良くなかったのかもしれませんが、「あんまり人に会えないな」と思いました。

ただ、イベント事になるとこれだけ人が集まるということは、まちに愛着がある人が多いんだろうなと思っています。

—— 札幌の中で、篠路はどのようなまちという印象がありますか？

線路の東側は“碁盤の目”とは違ったイメージ

小澤 篠路地区を俯瞰してみると、線路の西側は“碁盤の目”状に区画された住宅地、一方で東側は河川がある影響で道路も湾曲していますし、歴史的なエリアもあって、“碁盤の目”と違ったまちのイメージだと思います。まちの西の方から来て線路を越えると、その違いはすぐに感じられると思います。

昔の地図で土地利用の変遷を見ると、面白いのが1950～52年。駅東側が、篠路のまちの発展が始まったエリアということがよく分かり、腑に落ちました。特にこのエリアは、普通の住宅地と脈絡が違うな、という気がしています。

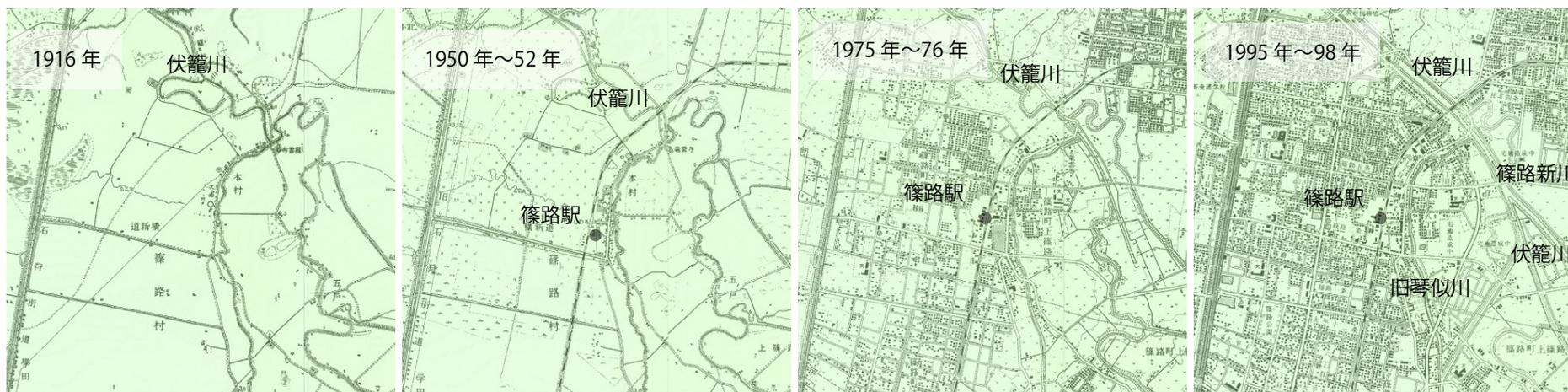
篠路の魅力について

—— 地域の魅力については、鈴木先生が仰っていた、歴史や環境資源も大きな要素ではあると思いますが、空間や立地に関する魅力はいかがでしょうか？

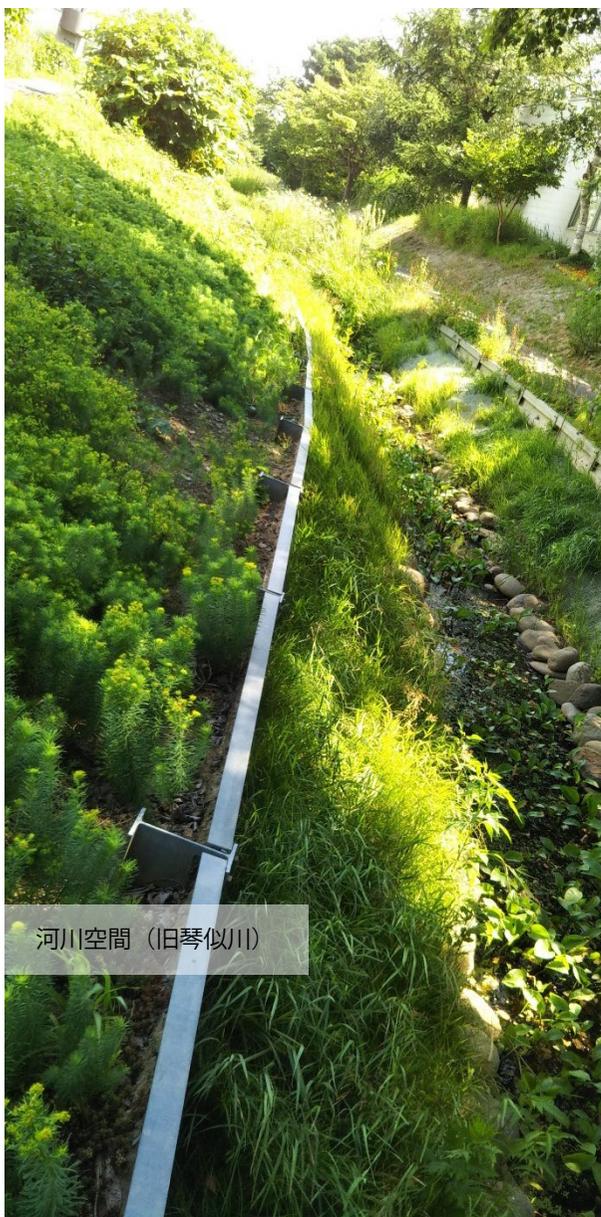
魅力と人を結べば、色々な可能性がある

鈴木 小澤先生も線路を越えると雰囲気が変わると仰っていましたが、JRや幹線道路網など交通の軸がありながらも、河川や公園・緑地に囲まれ、昔の歴史や文化を感じられるような地域が残っていると思います。

このような歴史や自然の財産といった篠路の魅力をうまく人と結び付けられれば、色々な可能性は出てくるのかと思います。



篠路白書を基に作成（元データ出展：今昔マップ on the web）



河川空間（旧琴似川）

—— 住宅地として整備されている中でも、歴史や自然という魅力が空間の中に息づいているのですね。

“人と結び付ければ色々な可能性がある”というお話は、小澤先生のお話とも関連するかと思いますが、いかがでしょうか。

まちの景観は “使われ方”が大事

小澤 どこかの場所を開発したり建物を建てたりすることで、機能的には現代的なニーズにあうものになるとは思いますが、それだけでは地域の特性にあったものにはならないと思います。我々は「景観」という言葉を使いますが、よい景観には空間や建物だけではなく、人の活動がそこにどう入っていくかが大事です。まさにここに住んでいらっしゃる方が、どんなまちの使い方をしたいのだろうか、そこを幅広く考えていただき、外から我々が発掘するようなことが必要かなと考えています。

—— まちづくりのプロセスにも係る大事なお話ですね。

小澤 伏籠川から東側が農地、さらに東側にはモエレ沼公園があります。メリハリがついていて、俯瞰しても面白い立地だと思います。

鈴木 北西の方には茨戸川があり、その先には海もあります。昔、ボート部だったので茨戸にはよく行っていたのですが、篠路のまちは海などに比較的近く、南にいくと都会的な機能があり、ポジション的に非

常に面白く興味深い地域だなと思っていました。

—— 札幌の中心部にいけば都会的な要素も楽しめ、色々なアクティビティの拠点にもなる地域ですね。

普段見ているからこそ、 気づかない魅力がある

内川 東京だったらいいベッドタウンといわれるエリアですね。都心部から20分でこの環境があり自然が味わえる立地は貴重だと思うんですが、札幌に元々住んでいる方は、自然があることに慣れてしまっているから、ありがたみというか、すごくいい環境ということに気づきにくいかもしれないですね。

まち歩きが好きな3人なので、まちの特徴には気づきやすいかもしれませんが、普通に生活していると自分の身のまわりのことしか意識しないことも多いと思うので、そのあたりの違いや特徴を地域の方々が理解すると、活動に発展しやすいのかと思います。

—— 普段見ているからこそ気づかないこともある、ということですね。

内川 そうですね。同じものを見ても、外の人の視点で見ると全然違う見え方になることもあると思います。

—— ありがとうございます。では、テーマ2に移っていきたいと思います。

テーマ2

魅力を活かしたこれからのまちづくりについて

みんなで取り組むまちづくり

—— 地域の方々と行政が連携してまちづくりを行っていることは篠路のまちづくりの特徴かと思えます。地域と行政が連携したまちづくりを進めるうえで、どのような役割分担がよいのか、ご意見を頂ければと思います。

まちは、身近な思いから “育てる”もの

鈴木 住民主体ということがよく言われますが、“担わないといけない”という責任感や義務感を感じると、住民の方も関わりづらいと思います。

まずは、小澤先生が仰っていたように“まちをどう使うか”という目線で、自分が興味のあること、例えば河川が好きなら河川、歴史が好きなら歴史、と好きな分野で“こういうことがやれたらいいね”という想いや“地域にあったらいいこと”を発掘していくことが重要です。

そのなかで、地域と行政が協働したらさらにいいものができそうだ、という時には協働で行えばいいと思いますし、住民だけでできるようなこと、“私たち

でやってしまった方が早いよ”ということは、できる範囲で、できることを楽しくやることが重要ではないかと思えます。役割と言いたくはないですが、それが結局、住民の担うべきポジションに繋がっていくのかと思います。

まちはつくるものではなく、“育てる”もの。子育てと同じで、子ども（まち）も育っていきますが、親（住民・行政）も育っていく。一緒に学び親子になっていくことと同じで、いきなり100点のものをつくるのではなく、20年30年かけて、10点、20点のところからでも大きく、魅力ある住みやすいまちに育てていくことが大事だと思います。

—— なるほど、“子育て”は分かりやすいですね。一方で、住民の方が思っているまちづくりは、いまのようなお話と乖離があり、“とっつきにくい”ようなイメージを持たれている方もいらっしゃると思いますが、いかがでしょうか。

身近な活動がまちをつくって いるという意識が大事

小澤 居住地として使い良くするために、インフラ整備や施設整備などを行政にしてもらう感覚の方も



H28年度に実施したワークショップの様子

多いと思います。篠路でいえば、横新道の交通渋滞解消を図る高架化、このようなハード面を住民の方々が自ら担うのはハードルの高い話ですよ。

ですが、自分たちの身近な活動がまちをつくっていく、というイメージを持っていただけないかと思っています。土木や建築など大きなお金のかかるものもあれば、それを地域の方がどう使うか、トータルにデザインするということが大事です。例えば自分の店の軒先を掃除したり、花を植えたりしても景観的に変わっていきます。決して、まちづくりが遠いものだと思ってほしくないなと思います。

—— 篠路では基盤整備が進んでおり、地域の要望を聞きながら行政が進めてきたまちづくりを、地域の方々がこれからどのように“育てていくのか”が大事な視点ですね。

まちに関わる“きっかけ”は？

—— これから地域をどのように使い、育てていくか、というなかで、色々な方がまちへ関わる“きっかけ”が、必要かと思えます。篠路での“きっかけ”について、ご意見を頂ければと思います。

使う人の想いが大切

内川 皆さんの話を聞いていて感じたのは、暮らしている人たちの日々の暮らしが繋がり、蓄積されてまちになっていくということです。自分にとってのまちの居心地のよい場所をどんどん見つけていく、ということがまちの魅力に繋がっていくと思うので、そういった視線でまちをみて頂くことが、きっかけになるかと思いました。

私が関わっている札幌駅前通のまちづくりでは“チ・カ・ホ”という基盤がありますが、基盤整備だけでうまくいったかは分かりません。行政が制度設計してくれていて、それを市民の皆様が使っていただくことでよいものになっています。使う方が自ら“こうなったらいい”とか“なんかちょっと足りないかも”という想いをもつことが大切で、それがまちづくりのきっかけとなって、自分たち自ら解決できることに繋がっていくと思います。

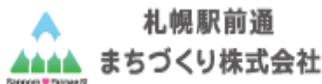
—— 行政主導ではなく、自分たちの気づきから色々な活動や事業に展開していくということですね。もう少し詳しく教えてください。

自ら解決できることから、次第に展開した

内川 チ・カ・ホの広場を運営していて“あれ足りない”、“これ足りない”と思うことが良くあります。そこから、新しいことを始めるのですが、“あれやったら楽しそうだな”と思うくらいの方が長く続いています。“これをやらなくてはいけない”と始めたものは、2、3回やると疲弊するので(笑)。

ただ、様々な活動も自分たちだけではやりきれないので、仲間探しを始めるんですよ。“フラワーカーペット”は学生の提案で始まっているものなのですが、これも事務局だけでは3回ぐらいで手一杯になって、そこから一緒にやってくれる人を探そうとなりました。

篠路では、既に色々な活動が行われているので、長く活動を続けていただくためには、元々活動をされている人たちが、仲間を増やすために参加しやすい



札幌駅前通の地上と地下を魅力ある都心の「顔」として育て、継続的ににぎわいある地域づくりを進めるまちづくり会社。

—現在の代表的な取り組み—

【チ・カ・ホ】チカチカ☆パフォーマンススポット、kuraché（クラシェ）…等々
【アカブラ】サッポロフラワーカーペット、さっぽろ八月祭、さっぽろユキテラス…等々
【駅前通】展望ギャラリー「テラス計画」、Happy Tree Street、アカブラリー…等々

っかけをどう作れるかは大事かもしれないですね。門戸を広げるイメージですね。

フラワーカーペットも、いまは簡単にボランティアが集まるようになりましたが、1回目は集まらなくて大変な目にあっていたので(笑)

—— 小さく始めて、実行しながら、次の課題を見つけていくことも大事ということですね。

例えばどんな活動ができる？

—— 色々な方々が“きっかけ”を持つと、様々な活動に発展していくのかなと思います。自然を活かすなどのお話もありましたが、篠路ではこんな展開ができるのではないかと、ということをお聞かせください。



“緑道でお茶を”ぐらの想いから始めてもいい

内川 緑道を綺麗にする活動は、そこの景色を美しくしたい思いでやっている方が多いと思うんですね。そこで、例えば“緑道でおいしいコーヒー/お茶を飲んでみたい”という思いで始めてもいいと思います。自分が日常で行っていることと、篠路のまちの景色を楽しむこととかを組み合わせることで、より居心地のいい場所を見つけやすくなると思います。

鈴木 緑道でお茶を飲むっていいですね！そういうことがきっかけだと思うんですね。

私の地元の活動では、清掃・美化活動からスノーキャンダルに発展して、さらに拡大して機能を増やし、冬まつりになっています。最初は大人中心だったのが“子どもを巻き込もうよ”ということで、今は子ども主体の冬まつりになっています。

内川さんが仰ったように、“ちょっと足りないな”とか“子どもも集まるといいな”とか、そうした気づきや発想が重要かと思います。最初のちょっとしたきっかけが火種となり、好きな人が集まってきて…。面白いことをやっていけば自然に人を巻き込み、広がっていくと思います。

そういったことを篠路らしくやれると面白いですね。お忙しい中でコラボは難しいかもしれませんが、例えば篠路の製粉会社で製粉した粉を使ってお菓子づくりの教室を行うとか、子どもと一緒に食べるイベントをやるとか…。



—— 色々と繋がっていくと、様々な可能性がありそうですね。

鈴木 歌舞伎もうまく活用できるといいですね。いきなりみんなが歌舞伎の演技を習うのはハードルが高いかもしれませんが、まずは歌舞伎に親しむために、簡単な動作や歴史、背景などを知る講座を設けるとか…。

空間的にビジョンを描ければ 更に次のステップへ繋がる

小澤 色々な活動が色々な場所で盛り上がっていくと、まち全体に活気が出てくるので、ぜひそうなってほしいなと思っています。

それに加えて、個々の活動があちこちで独立的に起こっていくのではなく、篠路というまち全体の空間のなかでとらえてほしいなと思うんですね。

そのためには、このエリア全体が、他にはない、特徴ある場所だと共有した上で、“こんな空間になっていくといいね”ということと、ぜひ皆さんで話し合ってもらいたいと思います。すぐではなく、10年、20年、30年後のビジョンになると思いますので、“このエリアを特別な場所にしようよ、だからこんなふうに見せたいよね”というところまで議論ができると、一つのイベントから更に次のステップに繋がると思います。

そうなれば例えば、鉄道が高架になりますが、西側から見たときに、“線路の向こう側はちょっと違う雰囲気だから、その違う雰囲気をどうやって活かそうか”という話になっていきます。

そうした話を行政とも一緒に相談しながら、ガイドラインを作るということもできますし、ハードなものを作るだけでなくソフトや運営をどうしていくか、というところでも住民発意で行政を巻き込むような流れになると、すごくよくなると思うので、ぜひそこまで発展してほしいなと願っています。



—— 小澤先生は今のお話の続きになるかもしれませんが、最後に、皆さんから読者に向けてメッセージを頂ければと思います。

小澤 立地的にも、歴史的にも、自然環境的にも非常に面白い場所です。そこで自信をもって、まちを皆さんで作りに上げていくんだ、という思いで、小さなことでもいいので自分のできることから、その先の大きなビジョンを持つ動きに是非繋がっていただけたらいいなと思います。

内川 篠路は既に色々なまちづくりの活動がたくさんあって、その価値をいかに地域のみなさんに見えるようにしていくかが、大事なかなと思っています。せっかくいい活動をしているのに、それが全員で

共有しきれていないのもったいないですし、南側にも新しく住宅ができていたりして、地域の活動を知ることによって新しく住民になった方も参加してもらえることもあると思うので、みなさんで発信・共有して頂けたらいいなと思います。

こうした発信が、まちの皆さんにとって居心地の良い場所を日常のなかで探していける“きっかけ”につながったらいいかなと思いました。小さな取組から、色々な世代の人が参加して頂けるように発展してほしいですし、それにはまちの皆さんの取組や行政と連携した取組を段階的に進めていけたらいいんじゃないかなと思います。

鈴木 好きなこと、やってみたいの、ということ、小さいところからどんどんやっていただきたいなと思

います。加えて、新規だけでなく、既存で素晴らしい活動をされている方・団体もたくさんありますので、色々な領域に繋げていってほしいなと思います。例えば、神社と結びつける、公園と結びつける、子どもと一緒に来て喜んでもらえるよう工夫する、など、色々と周りに手を出していってほしいです。そういうことが広がってくれば、皆さんが楽しめるようなイベントやまちになっていくのではないかなと思います。

私も微力ながら、繋げるときにお手伝いしたいですし、一緒に楽しめるようなものがあれば、お声がけいただきたいと思ってます。

—— 心強いお言葉を頂きました。本日はありがとうございました。

パネリスト

- 鈴木 克典 委員長
北星学園大学 経済学部/教授 ・ 検討委員会 委員長
- 小澤 丈夫 委員
北海道大学大学院工学研究院/教授
- 内川 亜紀 委員
札幌駅前通まちづくり株式会社/ 統括マネージャー

ファシリテーター

- 野本 利樹 昭和株式会社

事務局

- 札幌市事業推進課
- 昭和株式会社



内川亜紀委員 鈴木克典委員長 小澤丈夫委員

※写真撮影時以外はマスクを着用しております